

グローバル化時代の知識形成

——新百科全書プロジェクトと TCS センター——

丸 山 哲 央

〔抄 録〕

西洋に端を発する近代知が反省的に批判されてきたが、今日の電子メディアの発達と人類社会のグローバル化現象が顕在化するなか、従来の知識体系が根底から問い直されている。活字文化が後退し電子化した多元的メディアが優勢を占めるようになり、バーチャルな電子空間における異質な情報の混交がみられる。脱領域化し続ける知識は新種の「グローバル文化」を形成する可能性を内包している。

このような状況下で、21世紀初頭にイギリスのTCSセンター (Theory, Culture & Society Centre) を拠点とした新百科全書プロジェクト (New Encyclopaedia Project: NEP) が発足した。これは、現代の新たな知識形態とその創出、集積、体系化の実態を探究する地球規模の国際プロジェクトである。筆者は、非西洋圏の日本側のメンバーとして同プロジェクトに参加してきたが、本稿では、このNEPの活動内容を概観し、現代の人文・社会科学におけるその意義について考察する。

キーワード グローバル化、デジタル化、グローバル文化、コスモポリタン、百科事典

はじめに

知識は何のために、いかにして形成され集積されるか。百科事典やアーカイブス (archives) はこの知識の集積所であり、それは当該文化の認知的要素の中核をなしてきた。体系化された情報としての知識は、教育などの社会化のメカニズムを経て社会成員に内面化されて個々の行為の方向づけに関わる。しかし今日のIT技術の発達は、文化が創出され集積される形態と文化の機能様態を変えてきている。このようななかで、新たな知識形態と知識の再分類の方法を探究するための新百科全書プロジェクト (New Encyclopaedia Project: NEP) がイギリスのTCSセンター (Theory, Culture & Society Centre) を拠点として発足した。

TCSセンター (Theory, Culture and Society Centre) は、現在イギリスのノッティンガム・トレント大学内に置かれた人文・社会科学の研究所で、所長は社会学とコミュニケーション論の教授であるMike Featherstoneである。彼はTCSセンターを基盤にして、社会学をはじめとした社会科学と人文科学、文化科学さらにはカルチュラルスタディーズにまたがる広範な領域での問題設定を行い、学際的かつ国際的な研究組織やシンポジウムなどを編成し主宰してきた⁽¹⁾。その成果は、定期的に発行される学術誌 *Theory, Culture & Society* 誌と *Body &*

Society 誌、さらに TCS Book Series に掲載され、いずれも Sage 出版社から刊行されている。このうち、*Theory, Culture & Society* 誌は、1982 年の創刊以来 Featherstone が編集長を務め、イギリスを中心に欧米全域に亘る研究者のネットワークを形成し、現代の人文・社会科学における先端的な問題提起を行ってきた。特に、グローバル化、グローバル文化、ポストモダン、消費文化、コスモポリス等々の鍵概念をもとに現代社会分析の新たな枠組みと方法を提示してきた。TCS グループは、社会学をはじめとする社会科学と人文科学の境界を越えて、文化理論の構築を試み、文化研究を現代社会分析の中心的テーマとして定着させてきたといえよう。

この TCS センターの活動を基盤として、Featherstone 主導による新百科全書プロジェクト (New Encyclopaedia Project: NEP) が発足することになる。それは、グローバル化と電子化によって変容する現代社会の文化を、多元的な角度から分析しようとするものである。従来の専門科学の領域設定に基づく研究には限界があるとして、ここでは学際的で国際的な方法が採用されることになる。

NEP を組織するメンバーは、TCS のメンバーと重なる場合もあるが、外部組織や外国のメンバーも含まれている。主要メンバーは、Featherstone の他に、Scott Lash, Bryan Turner, Roy Boyne, Couze Venn 等がいる。また組織体としてはケンブリッジ大学の CRASSHU 研究所 (Center for Research in Arts, Social Sciences and Humanities, Cambridge University) が協力関係を結んでいる。

本稿では、TCS センターによる NEP の概要と具体的な手法を整理、検証するとともに、現代文化の本質について考察する。

1. 新百科全書プロジェクト (NEP)

2000 年初頭に提出された新百科全書運動の趣意書 (manifest) を中心に、同プロジェクトの構想と具体的な活動手順について眺めてみよう⁽²⁾。

この百科全書プロジェクトの発端は、Featherstone を中心とする *Theory, Culture & Society* 誌の編集グループと同誌の出版元である Sage 出版社との協議にもとづいている。対象とする領域は社会科学と文化科学 (social and cultural sciences) 全般に関わっているが、とくに TCS 誌が扱ってきたテーマに焦点をあて現代の知識の形成と再分類について探求するというものであった。そこでは、既存の百科事典 (encyclopaedia) の分類システムを踏襲するのではなく、新たな概念化と分類方法に関する基準が設定されている。

では、既存の分類方法を単に踏襲するのではなく、これを批判的、反省的に再構成し、現代文化および知識の形成を理解するための鍵概念とは何か。それは次の 2 点である。

- (1) グローバル化 (globalization) : グローバル化は市場化 (marketization) とアメリカ化 (Americanization) のように均一化をあらわすと同時に、差異自体がグローバル化するという意味でもある。欧米中心の支配的社会科学は他の社会からの発想をこれまで無視してきただけでなく、自身の概念化と分類システムの様式を無反省に発信し続けてきた。しかし、異文化としての非西洋の知識がグローバル化の中で姿を現すにつれて、支配的であるが実は特殊な (dominant particular) 視点から生み出された西欧的一般化と正当

性に疑問がでてきた。すなわち、グローバル化現象によって地球上の非西洋地域で形成された知識に目が向けられるようになったのである。

- (2) デジタル化 (digitalization) : 情報や知識の形成・伝達・蓄積には、新しいメディアやインターネットのような新情報技術 (IT) と電子空間 (electronic virtual spaces) を理解し、利用する必要がある。デジタル化は情報の保存形式 (紙に対する電子という) を変えるだけでなく、情報へのアクセス形態をも変える。つまり、電子の超テキスト (hypertext) はひとつのテキストの内外を瞬時に飛び越え多元的テキストをまたがってつないでゆくことができる。これはページをめくりながら読書するというような、アナログ的に集積された知識に直線的にアプローチするのと異なる。デジタル化された知識は物理的空間の制約から自由に分離、結合し (hyperlink)、バーチャルな空間で新種の知識を創出することもあり得る。つまり、知識形成の場が特定の空間的位置に限定されず自由な移動が可能なため、文化の多元化、多極化という現象が現れてくる。さらにデジタル化は、イメージやビデオ資料をテキストに取り込むが、これは単なるテキスト中の補助的イラストの付加とは異なり、新たな形の異種記号間統合を意味している。

大学アカデミズムは以上のような変化に適応できておらず、知識の創造と伝達、さらにその保存と分類に関して、理論的、実践的両面で電子メディアの利用が遅れている。一方、現代の学生世代は様々なメディアによる電子情報技術に慣れ親しんでおり、このことがテキスト的 (textually) というより視覚的 (visually) に思考する習慣を生み出している。これは、知識のマクドナルド化またはディズニー化につながる可能性もある。しかし、研究教育の中心をなしてきた活字形態の知識形成がいまやデジタルメディアとの競争下に置かれており、アナログ世代の研究者もこの新形態を利用することを迫られている。

次いで、NEP の具体的な計画について触れておく。

まず、世界各地で discussion, seminar, workshop を開催し理論上、分類上の問題を論じ合って、プロジェクトの作業手順と日程を決める。参加者には広範な研究者レベルのメンバーが含まれるが、デジタル・コミュニケーションが一般化した今日、種々の関係者や組織と接触するという柔軟性が求められる。従って、商業関連のソフトウェア制作、出版社、IT 産業、シンクタンク、公立図書館やアーカイブス、グローバルな NGO 組織等の関係者とも接触することが目論まれている。

対象とされる知識の領域は、社会科学と文化科学 (social and cultural sciences) の範囲に絞られているので、あらゆる領域を網羅した旧来型の百科事典ではない。重要なことは、既存の思考枠組 (本事典自体の枠も) を超えた結合 (hyperlinks) (インターネットを通した) であって、このプロジェクトの目的のひとつは、「結合場所 (junction box)」ないしは「スーパーターミナル」を設けてデジタル化した知識の相互媒介を行うことである。つまり、知識の新しい統合、複雑化した諸現象の再整理であり、しかもそれは国民文化の偏見から自由なコスモポリタンの感覚を発展させる事に通じる。従ってそれは、新しいデジタル・メディアが文化の再形成にいかに関わるか、さらにグローバルな文化の創出は可能か、についての検証でもある。

2. 知識の脱中心化

従来の主導的な知識人や研究者は最新の情報技術に抵抗感があった。そのため、人文科学、社会科学の研究者が知的実践の変革に気付くのが遅れたといえる。しかし、最近の市場化と低コスト化の波の中で、これまでの通信教育をさらに改良したインターネット大学が、知識の生産と整備に力を発揮するようになってきた。これは、多元的メディアを通し、遠隔地の受け手にも対応が可能である。このことから、McUniversityのような標準化とフランチャイズ化（ハーバードのMBAが一例）に導くのか、それともグローバル化と電子メディアの発展を通じたより豊かな知の形成へ向かうのか、という二面的な結果が予想される。前者の場合は、マイクロソフト社がオペレーションシステムの独占に向かうように巨大な多国籍企業による知的市場の支配という面が顕著となるであろう。一方で、後者に関して、グローバル化と脱中心化（demonopolization）による既存の文化的権威の後退という現象が考えられる。つまり、文化的脱分類化、正典（canon）の権威消滅、大衆文化の多元的基準の復活といったことがいわゆるポストモダンの文化的特質として顕在化するのである。

新たな電子メディア（electronic media）、特にインターネットのようなネットワーク化されたコンピューターシステムの発展が、このような傾向を強めるが、このデジタル・メディアは、情報へのアクセスにおいて、早さ、可動性（mobility）、柔軟性を備えている。さらに情報の再生や、情報の相互作用、また直線的記述のテキスト同士の結合を内外の超テキスト的（hypertext）なジャンプによって実現させることもできる。本来特定のテキストは境界を形成して受け手に関与してくるものであるが、新種のメディアを通して超テキスト的な情報接触がなされるということは、受け手が秩序だった読み方を超えて情報に接することが出来るということである。従って、ひとつのデータベース（コンピューターの保存庫に設けられたデータの構造化された集積）内で瞬時のジャンプが可能だけでなく、他の関連データベースのなかにも入ってゆくことが出来るのである。

高度結合（hyperlink）は、特定のテキストを超えて、イメージや映像を結合できるので、様々な画像やアイコンからのジャンプも可能である。これは、一見無関係なもの同士のメタ・レベルの結合という意味で夢における超現実のシンボリズムにも比肩されよう。イラストや芸術作品をテキスト的記述に変換する可能性とともに、多元的メディア方式（format）のもとで資料を扱うことも可能である。つまり広義のシンボルの統一的把握ができるということである。このことは知識人が長い間保持してきたテキスト的権威を破壊することであり、同時に作家と芸術家や映像作家の混成編集による「知識」の創出、再生もなされることになる。つまりそれは「知識」内容の美学化（aestheticization of content）というだけでなく、確立された権威のアカデミズム的解釈を流動化させ、別の形の複合形式を生み出すことでもある。

既存の境界の流動化と、これを超えた情報源に容易に接近できるということは、新たな認識枠と問題意識が生み出されることでもある。すべての文化的様式が複製化されデジタル化されているデータの大海へアクセスし、知識をより完璧なものへと修正することができる。

これは別の形のコスモポリタンの夢の実現であるとされる。

経済的なグローバル化は斉一性へ向かうという一般論がある一方で、経済現象の水面下では差異のグローバル化が進行している。文化や伝統のグローバルな舞台での範域拡大ということは、単に文化の陳列台がにぎわうというのではなく、グローバルな場での文化や文明の衝突でもあり、知的領域でのダーウイン的闘争が展開されることでもある。実際、70年代以来の東アジアの復活は、グローバル経済だけでなく知的、学術的ヘゲモニーでの力関係への影響もでている。アジアのような非西洋圏から西洋へ移った知識人によるポストコロニアル的見解では、西洋が自己の思考様式を純粋な形で維持発展することは不可能とされる。この混交という考え方は、Arjun Appadurai, Edward Said, Stuart Hall 等の研究によって明らかにされてきた⁽³⁾。

Marx, Weber, Wallerstein といった論者に見られるように、西洋近代の歴史を前提とした西洋社会学の多くの標準理論は、西洋の自己イメージである近代の有益な普及者として西洋を眺めてきた。このようなグローバルな歴史に対する支配的見解に対して、8世紀から19世紀初頭にいたるアジアの世界システム支配からみて西洋を周辺地域として位置づける見解もあり得るであろう。19～20世紀の西洋のヘゲモニーはつい最近もたらされたものである。しかしこのような見解は西側からの指摘を待つのではなく（それは新種のオリエンタリズムである）、アジアの研究者自身が欧米のものとは異なる自己の歴史の再検証と概念化や枠組み設定をすべきで、これが真の知識の再分類につながる。

この新百科全書プロジェクトの目指すところは、社会科学、文化科学の枠内で、グローバル化の権力バランスと電子情報技術の発達という関係を受け止め、現代の知識体系（文化システム）の形式と内容を再検討することである。これは相対主義的になるかもしれないし、知識の偶然の寄せ集めになるかもしれない一方で、固定化された知識の文脈を豊かにするという予測も立て得る。

新しいメディアの速度と可動性は空間的位置づけを超越させるものであり、反面、他との比較と自己の対象化によって自らの観点を自覚させることにもなる。地上の異なる場所における別の主体による知られざる空間的位置からの分類システムが明示されるにつれ、知識形成に多様な空間的位置づけが関わることが認識される。

グローバル・ガバナンス（統治）は、伝統的政府によるトップダウン方式から各地域からのボトムアップ方式への切り替えを必要としてくる。これは、国家主権や領土を超えて進展するグローバル化と電子情報化にふさわしい政策形成と決定方式である。しかし一方で、グローバルな権力バランスのあり方によっては、特定地域に偏ったガバナンスが支配する危険性もあり得る。国際公共財をめぐる権力なきグローバル・ガバナンスの可能性について、現段階ではその見通しを立てることは困難である。

3. 18世紀のコスモポリタンの百科全書と NEP の比較

18世紀啓蒙主義との関連で西洋近代の発展を見るには、知識の再編成過程としての百科事典作成事業を分析する必要がある。百科事典あるいは百科全書（encyclopaedia）とは、あら

ゆる領域の情報あるいは特定分野の知識について、これらを精緻化して（アルファベット順など）の系統的な方法で整理したものである。ここから、体系的に集積された芸術的、人文・社会科学的、さらに自然科学的知識は、有益な教養教育を生み出すという過程と結びつく。教養教育に関するギリシャ語から、円環教育（encyclical education）ということと百科事典（encyclopaedia, encyclopedia）は関係している⁽⁴⁾。

この時期の典型的な啓蒙主義的百科事典は、Denis Diderot と Jean Le Rond d'Alembert による『百科全書』Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres, 35 巻（1751～72）である。これは当時の著名な学者、科学者によって知識の完璧な分類を成すという理念のもとに企画された。同書の項目を分担執筆した啓蒙思想家達は、「百科全書派:アンシクロペディスト（Encyclopédiste）」と称される。基本的な前提は、自然界、人間界ともコスモポリスを形成しており、それは系統的に認知し記録可能な境界維持的システムであるとされる。彼ら啓蒙思想家達により分類、整理され、科学的に記述された諸現象に関する知識は、人類に生活の指針を与えるとともに様々な便益をもたらすものと考えられた。

このコスモポリスの発想は、コスモポリタニズムの概念と結びついているが、それは他との同一化であり、国際あるいは世界市民（cosmopolitan）の理念を意味している。コスモポリタンは都市型作法を身につけ、洗練されており、文化の多様性に寛容で社交性に富むといった属性をもつものとされる。これは 18 世紀型の理想主義の一種だが、19 世紀のナショナリズム勃興と国家の領有権拡大、市民の統制強化の中でその理念は後退していった。今日、このコスモポリタニズムが、グローバルな公共権と国民国家を超えた自己像と市民権という新たな認識対象が現出してきたために再認識されるようになっている。しかし、それは西洋の伝統的コスモポリタニズムとは異なるもので、グローバル化現象のもとで電子情報技術（electronic information technology）を介した別形態のコスモポリタニズムである。だが、電子メディアやインターネットは欧米の巨大企業に支配されており、この新種のコスモポリタニズムも結果的には伝統的な欧米主導型と同質の内容をもつという危険性を孕んでいる。

ところで、既存の伝統的手法を踏襲している百科事典と比較したとき、NEP による新百科事典にはいかなる特徴が求められるか。

ディドロ、ダランベールによる 18 世紀のフランスの代表的百科事典とこの新百科事典を比較すると、前者では、目的、意図は、コスモポリタニズムを目指しながら、実はヨーロッパの視点に立っており、理性中心で、技術志向の科学を重んじ、知識の集積と人間性の進歩を結び付けようとしている。また、当時の伝統やローカリズムに対抗する合理主義的コスモポリタニズムを標榜している。時期も、1870 年代という西洋型近代の拡張期である。これに対して、後者は、ヨーロッパに限られず、東アジア、南米、北米等、事実上グローバルな諸地域から事典の項目、内容を選定する。つまり、グローバルで多元的文化観からのコスモポリタニズムを目指し、文化的差異を当該文化の内外の複眼的観点でとらえようとしている。時期は 21 世紀であり、事典作成に関わるのは個々の領域の専門家にかぎられず、複数文化にまたがって活動する文化的媒介者（cultural intermediaries）というべき人々も含まれている。従って NEP の活動は、非西洋型コスモポリタンをグローバルな公共圏で養成するという目的に

も合致することになる。

ただ、NEPにおける実際の中心的使用言語は、取り敢えずは「グローバル言語」としての英語である。そのため、NEPは英語のグローバルな普及力を利用して現存の欧米中心視点 (Anglocentric view) の対抗要素を引き出すという二律背反性を内包している。

新字典が関与する領域は、従来の区分では人文・社会科学 (あるいは、文化科学と社会科学) ということになる。西洋でも用いられてきた専門領域の境界は、大体18世紀啓蒙主義的思考以来のものである。社会学の場合、18世紀から19世紀初頭にかけてのサン・シモンやコントによる境界設定 (codification) が、これに該当する。今、専門領域の区分がなされる多様な空間的位置と西洋以外の歴史的伝統に根ざした選択肢も注目されるようになっていく。同時に、電子メディアが各テキストの境界を越えてジャンプするという流動性をもたらし、それによって各テキスト間の新たな関連性が生じる。これは、すべてのテキストが間テキストとして存在することになり、あるテキストにとってのコンテキストとは何か、という領域区分の本質的な問題の問い直しがなされることになる。

A～Zの配列による項目検索方法も西洋流の知識分類方式であるが、他の記述方法である漢字やアイコンのような視覚的インデックスも考慮されねばならない。さらに西洋流の図書館システムにおける、カタログ、索引、文献目録などの様式を見直すことも必要である。

デジタル技術を用いた映像によって再構成された現実、オリジナルの現実と区別できない精巧さを持っている。新メディアと芸術との関係は、この新百科事典にも及ぶ。コンテンツの美学化ということは、現実の証拠、真実、判断といった概念にとっても変革的な意味を持つのである。

アーカイブ (archive:文書保管所) の種々の記録、資料を選別し保管するという事実記録の媒介者としての公的権威も、新メディアの利用によって減退する。この新百科事典は、事典の電子版 (electronic version) という側面も持っているのだが、そのためすべての人々に開かれており、同時に常に更新されるものである。Featherstoneは、これを一種の「データ都市 (data city)」とも言うべきものとしている。以上から、この事典の特色はManifestに従って以下の通りにまとめられる⁵⁾。

- 1) 中心テーマはグローバル化とデジタル技術の普及。
- 2) 欧米 (Western) 基準以外の知識形態および内容をも対象として、欧米的分類システムに対する批判的視点をも対話的方式で導入する。
- 3) 異なる分類システムにおける言語の規定、起源、用法も考慮して項目を選定。
- 4) グローバルな観点に立ち、様々な伝統と対抗文化をも念頭に置いて項目群を設定する。
また、特定の専門領域を超え、各領域を交差した項目選定を行う。
- 5) 世界各地からのメンバーによる定期的会合を開き、それぞれの項目を提示し、討論する。
- 6) 多元的な表現形式、例えば、イメージやビデオの資料も項目に加える。
- 7) 超テキスト的な網の目により、異種の項目へジャンプできるようにする。
- 8) 公開的システム (format) を採用するため知識が対話的、競合的な場におかれる。
- 9) 活字による出版と並行して、デジタル形式の項目はインターネットで利用可能とする。
- 10) 実践面でも、グローバル公共圏での倫理やグローバル化時代の教育内容を提示する。

- 11) グローバル化時代の知識形成についての実験的試みで、その方式はあくまで公開され絶えざる変化を受容するもので、固定化されない。

4. NEP における項目選定

NEP における項目選定に関し、まず一般的な手順について、次いで、2002 年の全体会議を通して具体的な作業例についてみていきたい⁽⁶⁾。

Manifest に記載された項目選定の一般的手順をみると、当初は欧米中心的偏り（Western-centered bias）が強く表れている。NEP の担い手である TCS センターのメンバー自体が英米の研究者で占められているため、自己を完全には相対化できていないのはある意味で当然である。

百科事典の項目選定は、知識の体系化を目指すという暗黙の前提の下になされる。そもそも「知識」とは、「情報」や「常識」と比して客観的で体系的な内容のものとされている。また、「知恵」とか「信念」「信仰」に対して、「知識」は主観的観点や主体の願望を排した価値中立的なものと考えられてきた。その意味では「知識」は、評価的あるいは表出的というより認知的性格が強いものである。しかし、NEP の目指すのは、特定の空間的・地理的偏りをできるだけ排して、しかも外界の把握方法を認知的なものに限定しないというものである。

項目選定の手順は、知識を組み立てる基礎単位としての用語（Meta-concept）、知識形成の場としての基本的制度と組織体（Meta-institution）、そして問題設定（agenda setting）ともいえるべき知識体系の展開様式（Meta-narratives）についての項目をまず定めてゆく。次いで、これらの項目と不即不離な関係を持つ一定の項目群（Clusters or Sets of entries）が選定される。さらに項目群中の各用語は、それぞれの（1）派生語（Breakdown of clusters）へ、さらにその（2）関連語（Associated）、（3）二次的関連語（Links）へと発展してゆく。これらの選定項目に対して、異文化である非西欧圏の観点からの（4）補完（Supplement）が加えられる。

上記の項目選定の手順を具体例で見てみる。

Modernity や Globalization に関連する項目群として、Modernity, Governance/ governmentality, State, City, Nation, Postcolonialism, Key 20th century social and cultural theorists/schools, Religion, Globalization, Technological culture, Consumer culture, Sites of cultural innovation, Culture industries, Disciplines 等が挙げられる。

このうち、例えば Modernity に関しては、Modernism, Modernization, Alternative modernities といった（1）派生語があり、さらに（2）関連語として Tradition, Postmodern 等が挙げられる。また、Globalization については、Global culture, Global cities, Global age といった（1）派生語が、そして（2）関連語は、World, International, Transnational, Postnational, Marketization, International law, International non-government organizations, Flows, McDonaldization 等があり、（3）二次的関連語としては、Network society が挙げられている。いまひとつの例として、項目群中の Sites of cultural innovation（文化変革の場）を取り上げる

と、まず多くの派生語が列挙される。それらは、Bohemian, Counter cultures, Culture industries, Museums, Department store, Mall or Shopping centres, Exhibitions, Ukiyo-e (floating world: 浮世絵), Theme parks, Cultural specialists, Avant-garde, Cultural intermediaries 等である。そして、(2) Walter Benjamin, (3) Consumer culture, High/Mass culture, Popular culture となっている。

このような項目選定は、TCS センターを核とした編集グループの対話的方法によって、学際的に設定され、これを下に 20 名程度の作業グループが組織される。グループメンバーはそれぞれの担当項目について 5000 語程度の草稿を作成する。メンバーはそれぞれの草稿を持ち寄り、会合を開いて討議する。この際の作業グループは、TCS センター以外の様々なメンバーによって構成される多国籍集団である。従って、個々の会合の討議の過程で、各項目の新たな類語や派生語が追加されることもあり得るし、まったく異なる立場からの別の基本項目の提案または補完もなされることがある。

編集グループと作業グループのメンバーは、イギリス以外のアジア、中南米、北米にまで拡大され、実際 2000 年以降、世界各地で NEP の会合やシンポジウムが開催されてきた。当初、イギリス以外では、日本での会合が最も多く、それにともない作業グループメンバーにも多くの日本の研究者が加わってきた⁽⁷⁾。これは、非欧米 (non-Western) 文化圏をプロジェクトに取り込む際に、日本はアジア圏にあって欧米との接点がもっとも緊密であると考えられたからであろう。項目選定と内容の検討および百科事典の枠組みについての全体会議が 2002 年 8 月 28 日から 30 日までの 3 日間、TCS センターにおいて開かれたが、この折に日本からのメンバーが 6 名出席して討議に加わった。

グローバル化状況のなかで非欧米圏の視点も取り込むという NEP の大前提ではあるが、共通の使用言語や基本用語の選定に関して限界が見られるのは否めない。日本のメンバーを加えるにしても、英語で項目についての記述を行うことが条件付けられている。さらに基本項目は TCS グループによってあらかじめ設定されており、日本のメンバーはそれぞれの項目の補完 (supplement) 的役割が与えられている。以下は、2002 年 8 月にイギリスのノッティンガム・トレント大学で開催された全体会議「Problematizing Global Knowledge: the New Encyclopaedia Project Colloquium」における項目とその担当者 (カッコ内) である。

1) 基本概念 (Meta-concept)

Encyclopaedia (Mike Featherstone), Logics (Bryan Turner), Classification (Roy Boyne), Enlightenment (Couze Venn)

2) 基本制度、組織 (Meta-Institution)

Archive (M. Featherstone), Collection (C. Venn), Hospital (B. Turner), University (Andy Wernick)

3) 問題設定枠組 (Meta-narratives)

Enlightenment (C. Venn),

4) 補完 (Supplement): 日本側のメンバー、つまり非西欧の観点からの項目補完。

Translation (油井清光)/2) の補完。

Buddhist monastery (丸山哲央)/2) の補完。

Encyclopaedia (川崎賢一)/ 1) の補完。

Modernity (和田修一)/ 3) の補完。

Consumer Culture (吉見俊哉)/ 3) の補完 (2001 年 6 月に論文提出)⁽⁸⁾。

以上の項目担当者によって提出された論文草稿（各論稿は英文 5000 語程度）をもとに、3 日間にわたる全体会議での討議が行われた。この討議に基づき、さらに各項目担当者は論稿を書き直して TCS センターに再提出し、新たな項目を追加しつつ NEP の作業が継続されている。この会議を通して追加された項目として、Discipline, Technology, Communication, Linearity/Liquidity, Complexity, Knowledge, Sex/Gender, Life, Time, Space, Language 等々がある。

NEP の活動は、2003 年にはイギリス、日本、北米、中南米に加えて、さらにインド、中国、イスラム圏にまで拡大され、各地で大小さまざまな研究会、シンポジウムがもたれている。従来の百科事典やアーカイブスにおける知識の形成と集積の方式を超えて、現代の新たな知識の分類と統合を目指す NEP の活動は、まだ現段階では英語という「共通」言語を用いてなされている。多元的な知識形態を認めるにしても、それぞれをいかに統合するかというメタ・コードの可能性についてはいまだ不透明である。

NEP は未完の壮大なプロジェクトである。それはいまだ克服できていない難点をいくつか内包したまま現在進行している。基本的な難点としては、多言語間、あるいは映像やアイコンと活字との間に共通のメタ・コードとも言えるべきものを設定し得るかという問題、さらに、特定地域の観点を取り込むことを目指しながらバーチャルな電子空間をメディアの中核に置くという矛盾である。なぜなら、実際の物理的空間と不即不離にあるアナログなローカル性を超えるところこそはじめてデジタル化が可能となるからである⁽⁹⁾。

〔注〕

- (1) TCS センターの主催する第 1 回の国際会議が 1992 年にピッツバークで開催され、第 2 回は 1995 年にベルリンにおいて「Culture and Identity: City/ Nation/ World」と題して開かれ、500 人の参加があった。その後、大小さまざまな規模の会議、セミナー、研究会が開かれ、その成果が *Theory, Culture & Society* 誌や TCS Book series におさめられている。
- (2) NEP の Manifest は公刊されていないが、2000 年初頭以来数回にわたって Featherstone によって作成され、規模の大きな研究会ごとに関係者に配布されてきた。ここでは、下記の 3 つの主要な Manifest と会議の資料およびその記録をもとに NEP の概要を記述した。
 - 1) Mike Featherstone, *The New Encyclopaedia: Explorations in the Social and Cultural Sciences — Discussion Paper and Proposal for a Project (Draft)*, January 10th, 2000.
 - 2) Mike Featherstone, *New Encyclopaedia of the Social and Cultural Sciences: Manifesto*, September 18th, 2000.
 - 3) Mike Featherstone, *Theory, Culture & Society: The New Encyclopaedia of the Social and Cultural Sciences: Manifesto*, December 14th, 2000.
- (3) これらの関連文献についてはここで逐一記載しないが、その一部については「グローバル文化論」との関わりで下記の小論で言及した。
丸山哲央、「文化のグローバル化—「グローバル文化論」のための覚書」『社会学論集』第 42 号、2006 年 3 月。
- (4) 本稿では encyclopaedia（米語で encyclopedia）は、NEP としてプロジェクト全体に関わる場合は「全書」、個々の用語選定などの具体的作業過程では「字典」と訳している。
- (5) 注（2）における Manifest の 2）と 3）にもとづいている。

- (6) Manifest の 2) と 3), および全体会議 (Problematising Global Knowledge: the New Encyclopaedia Project Colloquium 3, at Nottingham Trent University, 28-30, August, 2002) において配布された各項目担当者の資料にもとづいている。また, 会議の結果をもとに 2003 年に Sage 出版社において開かれた委員会での報告書 (Working Note/ Global Knowledge: the New Encyclopaedia Project, NEP Meeting, August 3, 2003, at Sage) も適宜参照した。
- (7) 日本において, 2000 年以来毎年 NEP の研究会や公開シンポジウムが開催されている。2001 年 6 月 25 日には一橋大学での「エンサイクロペディア・消費文化・近代社会」と題して, また 2003 年 10 月 16 日には佛教大学において「グローバル化時代の知の構築」というシンポジウムがそれぞれ開催されている。それ以外にも, 早稲田大学, 神戸大学, 東京大学において NEP の会合がもたれているが, そのうち TCS センターと東大との共同研究が発展して 21 世紀 COE プログラム (次世代ユビキタス情報社会基盤の形成) に認定されている。
- (8) これは先述の一橋大学におけるシンポジウム (2001 年 6 月 25 日) において提出された論文 (Shunya Yoshimi, The Topography of Consumer Cultures in the Globalization: Some Historical Perspective from the Urban Space) に基づき本欄でとりあげた。このシンポジウムにおいて M. Featherstone は主導概念としての Consumer Culture に関する論考 (The Problem of Classification in an Expanding Field: Consumer Culture, Encyclopaedic Knowledge and Globalizing Modernities) を提示している。つまり, TCS 側の Consumer Culture 概念についての日本における展開が吉見によるものということになる。2002 年の会議には吉見は出席していないが, 日本側からは他に西山哲朗と玉利智子 (TCS センター研究員) が参加した。
- (9) 2002 年のイギリスでの全体会議に先立って, 2001 年に NEP の分科会とも言うべき小会議が京都で開催されたが, その場でこのような根本的な問題が日本側のメンバーから提出された。主宰者である Featherstone 自身もこの種の問題が NEP が今後克服すべき大きな難点であることを認めている。ちなみに, この会議では日本語と英語が用いられた。出席者は, Featherstone, 玉利, 川崎, 油井, 丸山に加えて, 場知賀礼文, 荒木功, 辰巳伸知 (佛教大学) の合計 8 人であった。

〔付記〕

佛教大学の平成 16 年度海外研修助成をうけ, 2004 年 4 月から約半年間 TCS センターの客員教授としてイギリス, ノッティンガム・トレント大学に滞在した。本研究は, その成果の一端であり, 海外研修 (及び一般研修) のための機会を与えていただいた佛教大学に感謝したい。また, TCS センターの M.フェザーストン所長, 玉利智子研究員はじめ同センタースタッフには多大の研究上の助力をいただいた。ここに記して感謝したい。

(まるやま てつお 現代社会学科)

2006 年 5 月 10 日受理

